

矢城潤一

映画監督・
脚本家・小説家

やぎじゅんいち
 (本名/八木潤一郎) ●
 1986(昭和61)年、経
 済学部経済学科卒業。
 1961年生まれ。神奈川
 県出身。卒業後、フリー
 の助監督となり、経験を
 積んだ後、自己資金で『ある探偵の憂鬱』(2000
 年)を監督。バンクーバ
 ー国際映画祭などにノミ
 ネットされる。他の監督
 作として『ねこのひげ』
 (2008年)ほか。次回作
 が進行中で、劇場公開を
 予定。

就職試験は落ちたが、
遊び仲間の紹介で希望の業界へ。

大学に行かなくてもいいし、何をやってもいい、本学は自由な雰囲気でした。そうした自由さが自分に合っていましたし、いまの業界に入るきっかけにもなりました。大学4年になって就職を考えたとき、自分の性格や生活スタイルからして、「普通のサラリーマンは無理だな」と思いました。映画やテレビドラマを見るのが好きだったので、そうした方面に進みたいと、コマーシャル制作会社やテレビ制作会社の試験を受けましたが、全部、落ちてしまいました。

ただ、大学にはあまり行かなかった代わりに、地元が海水浴場で有名な神奈川県三浦海岸でしたので、夏は海の家でバイトをしたり、地元でよく遊んだりして、年上の方たちとも交流がありました。ヨットハーバー沿いにあり、映画やテレビなどのロケによく使われた喫茶店のマスターとは遊び仲間でした。

チャレンジ精神、反骨精神が、
私の映画づくりのエネルギーです。

「サラリーマンには、なりたくない!」と、映画業界に入った矢城潤一氏。助監督として経験を積み、さらに自己資金で映画をつくり、映画監督への道を自分で切り拓いた。そこには、持ち前のチャレンジ精神、反骨精神があった。

たので、相談したら知り合いの映画プロデューサーを紹介してくれました。

その映画プロデューサーに最初に会いに行くとき、考えたのは「自分を、どうアピールするか」。冬の寒い日でしたが、白いTシャツに革ジャンを着て、自分なりに「根性、見せよう!」と意気込んで行きました。単純ですね。

面接は合格。卒業する年の2月くらいには制作進行見習いとして、『相棒』で有名な和泉聖治監督の撮影現場に入りました。とにかく駆けずり回り、しょっちゅう怒鳴られたり……。体育会系みたいな現場でしたが、自分の性格に合い「面白い!」と感じました。

貯金で映画をつくり、
さらに、劇場公開を果たす。

現場に入って思ったのは、「やるなら監督だ!」。先輩の助監督さん、照明さんなどから「映画監督やるなら、ホン(脚本)を書きなきゃダメだ!」とアドバイスされ、当時はまだ素直な性格だったので、助言に従い、何本か書き上げました。

ただ、「映画監督になる!」といっても、日々の仕事をこなすだけでも精一杯。一方、ずっと助監督をやって「もう、やだなー」と思って、後に監督第1作となる、『ある探偵の憂鬱』の脚

本を持って営業に行きました。「見張る」「見張られる」というカットバック(*)だけの地味な映画で、「こんなの、映画になるわけない!」とか「つまらないね!」と延々と言われ続けました。私のほうは反骨精神とでも言いますか、逆に面白い映画になるということを証明したいという気持ちになりましたね。私には「挑戦したい!」という気持ちがありますが、いつもあります。それなら、「映画監督になりたいという夢を、自分でかなえよう」と、自分の貯金と借金で映画をつくりました。結局、当初の予算の2倍以上、かかりましたが……。

映画をつくって、次にステップアップできればと思っていましたが、やはり、そんな甘い世界ではありません。ただ、カナダのバンクーバー国際映画祭、国内の新人賞の映画祭などで認めてくれた方たちがいたので、監督に挑戦して良かったと思っています。

また、映画はつくったけれど、上映できないというケースが少なくない中、劇場で上映できたこと。これは、うれしかったですね。(談)

映画体験の原点。

「幼稚園の頃から、『ゴジラ』をはじめ『東映まんがまつり』などで、映画体験を積み重ねました。映画館に入ると、2回、3回ずつ見るのが当たり前でした。なかなか家に帰ってこない。よく映画館に母から呼び出しの電話がかかってきました」



映画『ふたたび』(原作の小説と脚本を担当。塩屋俊監督)は、『学校をつくらう』と同じ東京・有楽町スバル座にて昨年11月、公開された。



※演出技法の一つで、異なる複数のシーンを交互に短いカットでつなぐもの。